

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：32510

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320073

研究課題名（和文） 語彙とテキスト理解：読解に関わる語彙知識の多面性と語彙の意味について

研究課題名（英文） Lexicon and text understanding: Multidimensional word knowledge and word meaning in text/discourse comprehension

研究代表者

堀場 裕紀江 (HORIBA YUKIE)

神田外語大学・言語科学研究科・教授

研究者番号：40316831

研究成果の概要（和文）：

第2言語（L2）としての2種類の日本語語彙テスト（語義・語連想）を開発し、中級から超級までの学習者と母語話者を対象にした大規模調査を行った。語彙知識は語の頻度と種類、知識の要素、母語背景などの影響を受け、量的・質的变化を伴って発達することを検証した。語彙知識と L2 読解（日本語・英語）の関係についても実証的研究を行った。また、文脈における語彙の形・意味・使用に関する特性について理論的・記述的な言語研究を行った。

研究成果の概要（英文）：

We developed two vocabulary tests in Japanese, Word Meaning Test and Word Association Test, and conducted a large scale study for second language (L2) learners at intermediate to superior levels and native speakers of Japanese. The results indicated that the development of word knowledge is influenced by factors such as word frequency and type, knowledge component, and L1 background, involving quantitative and qualitative changes. We also investigated empirically into the relation between multidimensional word knowledge and L2 reading in Japanese and English. Furthermore, we conducted theoretical and descriptive research on linguistic features of lexical form, meaning, and use in context.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2009年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2010年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2011年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
総計	14,900,000	4,470,000	19,370,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：語彙、テキスト理解、第二言語習得、言語テスト、方言、テンスとアスペクト、読解タスク

1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクトは、テキスト理解にかかわる言語（語彙）とそれに関する知識（語彙知識）について理論的・記述的・実証的研

究をし、その結果に基づき言語教育に向けての有益な示唆を提供しようとするものである。

近年、第二言語（L2）習得研究・応用言語学の分野では、語彙の重要性が再認識され、

語彙知識の多面性に関する研究が英語を中心に
行われている。これらの研究から、語彙の
習得には、語の頻度や文脈、言語習熟度や既
存語彙知識、学習教材とタスクなどが影響す
ること、語彙力と読解力の間に相関があるこ
と等が明らかにされている。しかし、これま
で欧米語以外の言語を対象にした研究は極め
て少ない。欧米語の研究から得られた結論が
日本語にどのくらいあてはまるか判断するこ
とは難しい。また、母語背景による語彙習得
への影響、語彙知識の多面性と読解の関係に
ついて調べた研究はまだ数少ない。

また、日本語については、語彙と文脈の関
係（語形変化、アスペクト的意味、連語・語
用・地域性）に関する研究も進んでいるとは
言えない。日本語教育分野では、語彙指導に
対して、国内に限って言えば、従来から言語
の比較研究からの知見が参考にされてきたが、
語彙・語彙習得に関するまとまった知識が分
野に未だないため、体系的な指導が行われて
いない。

本研究の研究代表者である堀場は、平成
14-16年科研費研究の一環として中上級日本
語語彙テストを作成した。この語彙テストと
読解テストを用いた実証的研究によって、語
彙知識の多面性の特徴と読解との関係を明ら
かにし、テストの有効性が認められた (Horiba,
2012; 松本・堀場 2007)。しかし、一般化でき
る結論を得るためには、中級から超級までの
学習者に対応できる汎用性の高い語彙テスト
が必要である。また、堀場が連携研究者 (深
谷) と共同で行った平成 15-18 年科研費研究
では、英語学習者を対象にタスク指示が読解
と語彙習得に与える影響について興味深い結
果を得た (堀場・深谷 2006; Horiba & Fukaya,
2012)。しかし、この研究では、語彙知識の多
面性が読解と語彙習得に与える影響につい
ては調べていない。

以上述べた関連研究分野および教育分野の
状況とこれまでの自己の研究成果を踏まえ、
本研究プロジェクトは、「語彙とテキスト理
解：読解に関わる語彙知識の多面性および語
彙の意味について」というテーマのもと、第
二言語習得研究と言語研究の 2 つの柱をたて、
以下の目標課題を設定した。

2. 研究の目的

(1) 学習者の語彙知識の多面的特徴につ
いて実証的研究を行い、主に語彙習得理論の構
築に貢献し、言語教育への示唆を提供する。

(2) 学習者の語彙知識とテキスト理解との
関係について実証的研究を行い、主に読解理
論の構築に貢献し、言語教育への示唆を提供
する。

(3) 文脈における語彙の形・意味・使用に
関する特性について理論的・記述的な言語研

究を行い、言語学・言語教育学の分野に貢献
する。また、日本語教育で教えられる言語の
基礎となる首都圏方言を調査することによっ
てその実態を明らかにする。

上記の目標課題を達成するために、以下の
下位目標を設定した。

① 中級から超級までの日本語学習者を対象
とした語彙知識の多面的特徴について測定す
るテストを開発する。

② 第二言語としての日本語・英語の学習者
を対象に、語彙テストと読解テストを用いた実
験を行い、語彙知識の多面性とテキスト理解
の関係について調べる。

③ 日本語を中心にした語彙の特性（語形変化、
意味、連語・語用・地域性など）について理
論的・記述的研究を行う。

④ 日本語学習者を対象に、特定の語彙項目に
関する知識とテキスト理解の関係について調
べる実験を行う。

3. 研究の方法

(1) 日本語語彙テストの開発

前述の平成 14-16 年科研費研究プロジェクト
で作成した語彙テストを参考に、語の基本
的な意味に関する知識を調べる語義テストと、
語と語の意味的關係（上位語・下位語関係、お
よび、共起語関係）に関する知識を調べる語
連想テストの 2 種類を作成する。中級から超
級までの学習者に対応できるようにするため、
対象語は日本語能力試験出題基準 1 級～4 級
の語彙および様々な辞書を使って候補語を抽
出し、テスト問題を作成しながら絞り込み、
パイロットテストを重ねて、テスト全体を完
成させる。

(2) 語彙知識に関する調査

上記の 2 種類の語彙テストを用いて、国
内・国外の L2 学習者と母語話者を対象に大規
模な語彙知識の調査を行う。収集したデータ
は、受験者の特性（母語か L2 か、母語背景、
学習環境、言語習熟度）、語の特性（頻度、品
詞、語種）、知識の種類（語義・語連想、語連
想の種類）等の観点から分析する。

(3) 語彙知識と読解に関する研究

前述の語彙テストの簡略版を用いて、語彙
知識と読解の関係を調べるための実験を複数
行う。先行研究 (Horiba, 2012) を発展させ
た形で、韓国語・中国語を母語とする日本語
学習者を対象に行い、語彙知識の多面性と読
解の関係について調べる。また、語彙知識が
読解と作文にどう関わるかを調べるための実
験を韓国人日本語学習者を対象に行う。さら
に、読解におけるタスク効果についての先行
研究 (Horiba, 2008; Horiba & Fukaya, 2012)

を発展させた形の実験を日本語学習者、英語学習者それぞれを対象に行う。

(4) 発話における語彙使用についての調査
前述の語彙テストを受けた中国人日本語学習者を対象にインタビュー形式の会話テストとにより発話データを収集し、語彙の使用と語彙知識の関係の点から分析する。

(5) 首都圏方言の実態に関する研究
日本語教育において教えられる言語の基礎となるのは、首都圏の方言であると考えられるが、その実態についての詳細はこれからの研究課題である。本研究では首都圏地域の伝統的な方言とそれぞれの地域における変化の様相を見ることを目的とし、語彙の他音声・アクセント・文法について、多人数調査を含む面接調査を行う。また、語の現在の意味用法が、どのように確立してきたかを、文献をたどることによって明らかにする。

(6) 語彙とアスペクトの理論的言語研究
テキストが含む文が表す事象相互の前後関係(同時性や継起性)がどのように決定されるかを知っていることはテキスト理解における必要不可欠の知識である。ここでは、テンスやアスペクトといった文法事項の意味と語彙項目が含んでいるアスペクト的意味(事象構造、限界性、数性など)がどのように関連し合っているか、主として日本語を対象に分析する。具体的には、①1つの形式が複数のアスペクト的意味、テキストの機能をもつテイル形の意味機能の決定方法、②複数事象の前後関係の解釈に関わるとされる事象の限界性の決定方法と多義の限界性を生み出す概念機構の考察、③日本語教育におけるテイル形の指導の実態調査を行う。

4. 研究成果

(1) 中級から超級までの学習者を対象とした日本語語彙テスト(JWMT:語義テスト・JWAT:関連語テスト)の開発については、最終的に候補語訳800語の中から4つの頻度レベルにつき39語(名詞15、動詞15、形容詞/副詞9)、計156語を対象語として選択し、パイロットテストと修正を重ねてテスト全体を完成させた。両テストを通して、問題の中で選択肢として使用される語は対象語と同等以上の頻度レベルで、重複がない。国内外の学習者・母語話者あわせて400名以上のデータ分析の結果からテストの信頼性と有効性を確認した(堀場他2010)。また、短い時間でできる簡略版テストもそれぞれ作成した。

これにより、日本語の言語習得・学習評価の研究および実践分野で役立つ語彙テストを

提供し、同種類の他言語の語彙テストを用いた先行研究の結果との比較が可能になる。

(2) 語彙知識に関する調査については、L2学習者と母語話者(計400名以上)の前述語彙テストにおける応答データを分析し、以下の結果を得た(堀場他2010, 2011, 2012)。

① L2学習者、母語話者ともに、語彙知識には、語の出現頻度、品詞、語種および連想の種類による影響がある。学習者は、母語話者に比べて、語の出現頻度と品詞の効果が大きい。

② L2学習者だけでなく、母語話者にも習熟度レベルが存在する。

③ L2学習者と母語話者では、連想の種類と品詞の間の交互作用が異なっている。L2学習者は、名詞を起点とした共起関係の知識が最も安定しているが、母語話者は、共起関係については品詞の影響がない。

④ L2学習者は、母語(中国語か韓国語か)、学習環境(JSLかJFLか)に関わらず、高頻度語から低頻度語へと習得が進み、品詞の習得は名詞が最も早く、上下位語関係の知識の方が共起語関係の知識よりも習得が進んでいるが、母語と学習環境による影響は共起語関係や品詞(動詞や形容詞/副詞)、および、語種(外来語)に現れやすい。

⑤ JFL環境の教室内学習者の語彙知識には、日本語プログラムのカリキュラムと指導法による影響がみられる。

以上の結果から、L2学習者だけでなく母語話者についても語彙知識が頻度、品詞、連想の種類、習熟度の影響を受け、量・質ともに変化を伴って発達することを示唆される。また、意味的ネットワークとしての語彙知識の発達については、同じ品詞間での上下位語関係の知識は明示的に習得されやすいが、異なる品詞間における文中での共起関係の知識は文脈の処理を通して習得されるため、自然なインプットの少ない学習者は共起語関係の知識の発達が遅く、中でも動詞や形容・副詞を起点にしたネットワークが形成されにくいと考えられる。

この研究は、日本語の語彙知識の多面的特徴について検証したものであるが、L2学習者だけでなく母語話者も含めたこと、複数の異なる母語背景のL2学習者を対象にしたことによって、日本語教育の分野のみならず、L2言語の習得・教育に関わる研究分野一般に対して新しい知見を提示し、特に語彙習得理論の構築、および、語彙指導への示唆を提供するものである。

(3) 語彙知識と読解に関する研究としては、読んだテキストの内容の理解だけでなく、読

解におけるタスク指示の影響や、読解と作文を組み合わせたタスクによる影響について調べる実験も行い、以下の成果を出している。

① 日本語学習者 (65 名) を対象に行った語彙知識と読解に関する研究については、語彙知識の諸要素と読解の間に相関関係があり、語の基本的な意味に関する知識も語と語の意味的関係に関する知識も共に重要であるが、中でも語の共起関係に関する知識が読解を説明する最も強い要因であることを検証した (堀場・山方・西・李・田所 2012)。

② 日本人英語学習者 (145 名) を対象に行った英文読解タスクの研究については、内容再生データをテキスト因果構造とトピック興味の影響について分析した結果、再生には、一般にテキスト因果構造の影響がみられるが、トピック興味の大きい読み手は関連性の高い命題をより多く再生することを確認した (Horiba & Fukaya, 2010)。

③ 日本人英語学習者 (75 名) を対象に行った読解におけるタスク指示についての研究では、語彙テスト、読解テスト (再生) および作文テスト (テキストのテーマについて意見を述べる) を行い、語彙知識と読解および作文の関係、その関係におけるタスク指示の効果を調べた。これまでの分析から、語彙知識は読解、作文のそれぞれと正の相関関係があるが、タスク指示によって、その関係が異なるだけでなく、作文での使用語彙が影響されることが明らかにされた (Horiba, 2012)。今後、作文の中で表現されたアイデアと、読んだテキストに提示されていたアイデアとの関係についても分析を行う予定である。

④ 韓国人日本語学習者 (63 名) を対象にした語彙知識と読解と作文に関する研究、日本語学習者 (30 名) を対象にした読解タスクについての研究については、それぞれデータ分析の途中段階にある。

このように整合性のある一連の実証的研究を複数の異なる言語 (英語・日本語) を対象に行うことによって、日本語教育の分野のみならず、L2 読解・教育に関わる研究分野一般に対して新しい知見を提供することができる。特に、語彙知識の多面性とテキスト理解の関係、読解における語彙知識とタスク指示の影響、作文における語彙知識と読解の影響について検証することで、読解理論の構築、および、読み書きを中心とする言語教育への示唆を提供することができる。

(4) 発話における語彙使用についての調査については、前述の語彙テストを受けた同一の日本語プログラムに所属する中国人学習者 (64 名) を対象にインタビュー形式の会話テストを行った。会話テストは 20 分程度で、タスクとして自己紹介の他、質疑応答、ロールプレイ、絵を使ったストーリーテリングが含ま

れる。発話データをもとにアクセントの使用実態を調べ、語彙力との関係を調べたところ、学年が上がるにつれて語彙力が増すが、アクセントの正確さが下がることが確認された (木川 2010)。また、語彙テストで測定された語彙知識と会話で実際に使用した語彙の間どのような関係があるかを調べる研究については、データ分析の途中段階である。

これらの研究は、再認による語彙テスト (語義・語連想) を用いて測定した語彙知識と、会話の中での語彙の使用との関係を調べる実証的研究であるが、前述の作文を含めた研究とともに、その研究結果は語彙知識と処理能力という点について示唆を与えるものであり、L2 語彙習得理論の構築に貢献することができるであろう。

(5) 記述言語研究としては、共通語、東京語の基盤となる首都圏方言の実態を探るため、神奈川県小田原市においてアクセント・文法・語彙の調査を行った。

また、現代では階級社会の成員およびその出身者が用いる一人称代名詞「自分」の明治期以降の用法の変遷をまとめた。共通語、東京語の基盤となる首都圏方言の実態を探るため、神奈川県小田原市において 86 歳から 11 歳までの 72 名を対象に音声・アクセントを中心に調査を行い、その結果をまとめた (久野・木川 2012, 木川・久野 2012)。この他に、山梨県・埼玉県・静岡県においての体系調査を行った (木川 2012 他)。

(6) 理論言語研究としては、テキスト理解に重要な役割を果たすテンス・アスペクトの研究を重点的に行った。特に、進行・結果・維持・パーフェクトなど、テキストに含まれる事象の前後関係の決定に関わる機能を一つの形式で担っている日本語のテイル形の意味の決定方法を、概念意味論を修正発展させた事象投射理論によって明らかにした (岩本 2008, 2009, 2011)。さらに、複数の事象の同時性、継起性に関わる限界性の決定に関して、多義的限界性には「自己基準変化」と「増分変化」の 2 種類が含まれることを明らかにした (岩本 2010)。

また、アスペクトがヴォイス変換に関わる現象 (例えば、テアルが受け身と同じ意味になるなど) の類型 (日本語・中国語・韓国語・古代ギリシャ語など) を示し、それが事象構造の語彙化パターンとアスペクト関数の種類によって説明されることを明らかにした (岩本 2012)。テンスに関しては、一般事象と個別事象の解釈の違いに関わる時間表現の役割を事象投射理論によって構造的に明らかにし、

これまでに見落とされていた類型の型を指摘し分析した(岩本2011)。さらに、日本語の主要教科書でどのようにテイルが扱われているかに関する実態調査を行ない、その問題点を上記のテイルの分析をもとに考察した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

- ① Horiba, Y. (2012). Word knowledge and its relation to text comprehension: A comparative study of Chinese- and Korean-speaking L2 learners and L1 speakers of Japanese. *The Modern Language Journal*, 96, 108-121. 査読有
- ② 堀場裕紀江・山方純子・西菜穂子・李榮・田所直子 (2012). 「語彙知識の多面性はL2日本語読解にどうかかわるか」 *Scientific Approaches to Language*, 11, 215-239. 神田外語大学言語科学センター. 査読無
- ③ 木川行央 (2012). 「静岡県松崎町方言のアクセントにおける「ゆれ」の実態—語アクセント調査と談話資料の観点から—」『音声研究』15, 48-61. 査読有
- ④ 久野マリ子・木川行央 (2012). 「神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現象の動向」『言語科学研究』18, 11-29. 神田外語大学大学院. 査読無
- ⑤ 木川行央・久野マリ子 (2012). 「神奈川県小田原市方言におけるラ行音の撥音化」 *Scientific Approaches to Language*, 11, 89-101. 神田外語大学言語科学センター. 査読無
- ⑥ 堀場裕紀江・西菜穂子・松本順子・鈴木秀明・李榮・山方純子 (2011). 「日本語学習者の語彙知識の多面性—中国語母語話者の場合—」 *Scientific Approaches to Language*, 10, 49-83. 神田外語大学言語科学センター. 査読無
- ⑦ 堀場裕紀江・深谷計子 (2011). 「看護師国家試験における外国人看護師のテストパフォーマンス—テスト提示条件とテスト問題の影響を日本人看護師・日本人大学生との比較から探る—」『言語科学研究』17, 67-85. 神田外語大学大学院.
- ⑧ 木川行央 (2011). 「一人称代名詞としての「自分」」『言語科学研究』17, 39-65. 神田外語大学大学院. 査読無
- ⑨ 岩本遠億 (2011). 「事象投射理論による叙述類型に関する試論—時間的限定性と属性叙述—」『言語科学研究』17, 1-19. 神田外語

大学大学院. 査読無

- ⑩ 木川行央 (2010). 「松崎町池代方言における準体助詞と準体法」『言語科学研究』16, 55-73. 神田外語大学大学院. 査読無
- ⑪ 岩本遠億 (2010). 「経路移動事象の両義的限界性と増分性」『レキシコンフォーラム』5, 53-98. 査読無
- ⑫ Iwamoto, E. (2010). Toward the typology of stativization: The polysemous structure of the Japanese te-iru form. 『言語科学研究』16, 33-54. 神田外語大学大学院. 査読無

[学会発表] (計18件)

- ① 堀場裕紀江・西菜穂子・松本順子・李榮・山方純子 (2012. 5. 27). 「日本語学習者が目指すべき語彙力とは—2種類の語彙テストにおける学習者と母語話者の比較から—」日本語教育学会. 東京
- ② Horiba, Y. (2011. 3. 27). Task-induced strategic processing in L2 reading and writing. *American Association for Applied Linguistics*. 米国・ボストン
- ③ 岩本遠億 (2012. 3. 7) 「事象投射理論とアスペクト類型」アスペクト・フォーラム. 千葉
- ④ Fukaya, K., & Horiba, Y. (2011. 8. 25). Linguistic problems, technical knowledge problems, and sociocultural knowledge problems the foreign nurses face in the national examination in Japan. *World Congress of Applied Linguistics*. 中国・北京
- ⑤ 堀場裕紀江・松本順子・西菜穂子 (2011. 8. 21). 「中国語を母語とする日本語学習者の語彙知識の発達」 *International Conference on Japanese Language Education*. 中国・天津
- ⑥ Horiba, Y., & Fukaya, K. (2010. 8. 17). Second language readers' memory for narrative texts: The effect of interest and causal reasoning. *Society for Text and Discourse*. 米国・シカゴ
- ⑦ 堀場裕紀江・松本順子・西菜穂子・李榮・山方純子 (2010. 7. 31). 「第二言語学習者と母語話者の語彙知識—語項目、知識の要素、言語習熟度の影響—」 *International Conference on Japanese Language Education*. 台湾・台北
- ⑧ Horiba, Y. (2010. 3. 7). Word knowledge of nonnative and native speakers of Japanese. *American Association for Applied Linguistics*. 米国・アトランタ.
- ⑨ Fukaya, K., & Horiba, Y. (2009. 9. 4). Topic interest, language proficiency, relevance, and causal reasoning in L2 text comprehension. *British Association for Applied Linguistics*. 英国・ニューカッスル

- ⑩ Iwamoto, E. (2009.9.3). Toward the typology of stativization: The polysemous behavior of the Japanese Te-iru form. *International Conference on Tense, Aspect and Modality*. フランス・パリ
- ⑪ Horiba, Y., & Matsumoto, J. (2009.7.14). 「日本語彙彙テストの開発」 *Japanese Studies Association of Australia-International Conference on Japanese Language Education*. オーストラリア・シドニー
- ⑫ 岩本遠億 (2009.6.20). 「概念構造と空間構造の接点」 日本言語学会. 千葉
- ⑬ Horiba, Y. (2009.4.16). Word knowledge and its relation to text comprehension. *American Educational Research Association*. 米国・サンディエゴ
- ⑭ Horiba, Y. (2008.8). Task-induced strategic processing in L2 text comprehension. *World Congress of Applied Linguistics*. ドイツ・エッセン
- ⑮ 堀場裕紀江・松本順子 (2008.5.25). 「語彙知識とテキスト理解の関係—L2日本語学習者と母語話者の比較—」 日本語教育学会. 東京

〔図書〕 (計3件)

- ① Horiba, Y., & Fukaya, K. (印刷中). Effects of task instructions on text processing and learning in a Japanese EFL college nursing setting. A. Shehadeh & C. Coombe (編), *Task-based language teaching in foreign language contexts: Research and implementation*. John Benjamins Publishing. 査読有
- ② 岩本遠億 (2011). 「シテイルが持つ継続的状態性と結果の意味—井上和子『変形文法と日本語』と事象投射理論—」 長谷川信子 (編) 『70年代生成文法再認識—日本語研究の地平』 pp. 123-150, 開拓社
- ③ 岩本遠億 (2008). 『事象アスペクト論』 開拓社

〔産業財産権〕

- 出願状況 (計 件)
- 名称:
- 発明者:
- 権利者:
- 種類:
- 番号:
- 出願年月日:
- 国内外の別:

- 取得状況 (計◇件)
- 名称:
- 発明者:
- 権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
堀場 裕紀江 (HORIBA YUKIE)
神田外語大学・言語科学研究科・教授
研究者番号: 40316831

(2) 研究分担者
木川 行央 (KIGAWA YUKIO)
神田外語大学・言語科学研究科・教授
研究者番号: 50327186

岩本 遠億 (IWAMOTO ENOKU)
神田外語大学・言語科学研究科・教授
研究者番号: 50245289

(3) 連携研究者
深谷 計子 (FUKAYA KEIKO)
津田塾大学・言語科学研究所・研究員
研究者番号: 00238445

松本 順子 (MATSUMOTO JUNKO)
桜美林大学・基盤教育院・非常勤講師
研究者番号: 30448922

鈴木 秀明 (SUZUKI HIDEAKI)
目白大学・留学生別科・専任講師
研究者番号: 10583958

(4) 研究協力者
西 菜穂子 (NISHI NAOKO)
神田外語大学・留学生別科・非常勤講師

李 榮 (YI YOUNG)
神田外語大学・言語科学研究センター・研究員

山方 純子 (YAMAGATA JUNKO)
神田外語大学・言語科学研究センター・研究員

田所 直子 (TADOKORO NAOKO)
早稲田大学・日本語教育研究センター・非常勤インストラクター